

I・HEAP (Historical Thinking for History Teachers)

4章：学問的な歴史実践と学問上の方法

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

著者

・ Anna Clark

シドニー大学で歴史学の学位を取得後、Monash University で
高等教育の修士号を取得し、メルボルン大学で PhD を取得。
現在はシドニー工科大学の Australian Centre for Public History のフェロー。
教育関心は、論争的な過去、オーラル・ヒストリー、
歴史教育、記憶の研究、パブリック・ヒストリーなどを含む
オーストラリアの歴史や歴史学。主著・共著に『History Wars』、
『History's Children: History Wars in the Classroom』がある。



■用語

- ・ national literacy | 国民的リテラシー
- ・ historical literacy | 歴史的リテラシー
- ・ critical citizenship | 批判的な市民性
- ・ historical practice | 歴史実践

■議題

- ①歴史的思考押しのカリキュラムができた点は日本と同じ→どう教師を支援すれば良いか
- ②歴史的思考が西洋寄りになっているのはその通り。漏れているものは何か。

■イントロダクション (p.47)

・学校における国家の物語を教える歴史に異論を唱え、「歴史的思考 (historical thinking)」
(学問的な歴史実践のスキルと学問的な方法のスキルを取り入れた用語) を重視するアプ
ローチを取る方が、歴史学をよりよく反映するだけでなく、教室における歴史的な従事も促
進するということを提案している。

■歴史に関する不安 (pp.47-49)

- ・オーストラリアは 2001 年 1 月 1 日に連邦制 100 周年を迎えたが、1997 年の調査では、
インタビューを受けた国民のうち 43%は「連邦」が何を意味するか知らず、初代首相の
エドモンド・バートンの名前を知っていたのは 18%だった。
= (政治家や歴史家とは違い) 歴史の学習者のオーストラリア国家への関心は薄かった
- ・調査の結果、この現象はアメリカ、カナダ、イギリスでも起こっていた

■「国民的リテラシー」か「歴史的リテラシー」か (pp.49-53)

※「歴史的リテラシー」＝「歴史意識を媒介し発展させる特定のスキルセット・態度・

概念理解を備えた体系的なプロセス」(Taylor and Young, 2003)

- ・上記のような調査結果が出ると、「事実(を教えるの)に立ち返ろう」という風潮になる
→オーストラリアの政治制度や市民生活の起源を理解できれば、現代の社会や文化に対して重要な洞察ができる点で、有効ではある
- ・しかし、国民的リテラシーとしての知識に焦点を当てると、歴史に対して無批判になる
- ・歴史学習が不可欠な理由は、愛国的な市民を増やす必要があるからではなく、参加的で多元的な民主主義を実現するのに不可欠な「批判的な市民性」を育成する必要があるから
- ・実際、以下のように色々な歴史的思考の研究がされている

- A) 1970年代の UK Schools History Project から始まり、Lee や Ashby が発展させた、歴史教育における探究アプローチは（後者の立場に立って）教室での歴史実践を重視し、方法論に関しても史料分析やエンパシーなど歴史のスキルの発展を図っている。
→これは歴史家になることを目指しているから行っているわけではなく、高校卒業後に歴史を学ぶ人は少ないので、高校生うちに学ぶことが重要だから行っている
- B) ドイツの HiTCH (Historical Thinking -Competencies in History) プロジェクトでは、（歴史実践のスキルに関係して）以下の4つを含むコンピテンシーの育成を提唱した
- ①問いかけること、探究することに関するコンピテンシー
 - ②方法論的なコンピテンシー
 - ③(時間と関連した)方向性に関するコンピテンシー
 - ④(歴史実践の概念を使用する際の)学問的なコンピテンシー
- C) カナダの”Historical Thinking Project”では以下の6つのコンセプトを提唱している
- ①歴史的意義、②エビデンス、③継続と変化、④原因と結果、⑤歴史的視点、⑥倫理的側面
- D) アメリカの”Reading like a Historian”では、歴史的思考と探究のスキルを身につけさせるカリキュラムを提供している
- E) Barton と Levstik は、歴史の物語構造、反省的思考としての探究、視点を認識するという意味での歴史的エンパシー、思いやりとしての共感など、生徒が Doing History という行為に従事する際に必要な「文化的なツール」を生み出している
- F) ただし、歴史的コンピテンシーは、西洋中心の国々のものをベースにしているため、アボリジニが行っているような（歴史の）方法は、これらの理論に含まれていない
→例：伝統を口承する点、風景に関する物語的な特徴がある点など
→そのため、歴史教育の理論については、認識論レベルでの考慮も必要

- ・歴史的思考という概念は教育界に広がっている
→過去を理解するには歴史的背景を知ることが重要なのでコンテンツを学ぶことは重視
→それに加えて、「不自然な行為」である歴史的思考も重要で、
歴史的思考のスキルを身に付けさせるには時間をかけて実践させることが必要になる

■教室における歴史的思考 (pp.53-56)

- ・著者は 2005-2006 年に全国をまわり、約 200 人の高校生、歴史の教師、カリキュラムの関係者に、オーストラリアの歴史について考えていることを調査した
- ・2001 年以前は初代首相を知らなかった生徒も、その後知るようになっていた
→しかし、100 周年の時に映画を見た、というような授業を受けていた結果で、連邦が何かについては完全には理解できていない状態だった
- ・生徒たちは上記のような教え方に対して否定的な感想を持っていた
- ・調査した生徒の多くが、授業でより複雑な国家の物語を学ぶべきだと考えており、事実を教えられるだけでなく、議論や討論を通して学びたいと考えていた。
また、歴史教育は事実を学ぶだけでなく、批判的に解釈することも必要だと言っていた。
→国民的リテラシーを議論する際でも、中核的な国民の知識に固執するのではなく、複雑な歴史的思考の要素も含めて議論しないといけないといえる

■結論 (p.56)

- ・歴史教育の国際的な研究が進んだ結果、少なくともカリキュラムのレベルでは、事実だけ教えるような歴史教育に対する懸念は解消されている
- ・the Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority (ACARA 2017)は、最新の歴史のカリキュラムにおいて、以下のような言葉で歴史科を記述している

オーストラリアのカリキュラム

歴史は、生徒が以下のことを身につけることを目的としている。

- 生涯学習や仕事のために歴史を研究することへの関心と楽しみ。
情報を入手して積極的な市民となる能力と意志を含む。
- 過去、並びにオーストラリアを含む社会形成についての知識、理解、評価
- 歴史的な概念の理解と使用。
例えば、証拠、継続と変化、原因と結果、視点、エンパシー。
- 歴史の探究を実行する能力。
史料の分析と使用、説明とコミュニケーションのスキルを含む。

- ・今後の課題は (カリキュラムだけでなく)、継続的に研修したり、専門性を開発したり、リソースを提供することなどによって、教師をバックアップできるかどうかである。